
～箱～・・・高校生は告げる

那須asd

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

箱〴〵高校生は告げる

【Nコード】

N3948BA

【作者名】

那須asd

【あらすじ】

主人公朝城佳都、は普通の学校にかよう普通の高校生だ。

しかし、ほぼ他人も同然の人間にある日自分が能力者である、と告げられる。

彼の運命はいかに？

日常1（前書き）

この小説はBL小説です

日常1

俺はいつものどうりの道を走った。

学校へ行くための通学路。

いつもどうりの道、いつもどうりの風景・・・

現在の時刻は8時30分。

大遅刻だ！

「っ寝坊とか最悪!!」

叫びつつ、街の角を曲がる。この角をまがると学校が見えてくるのだ。

しかし、今日は角の向こうに学校が見えることはなかった。
真っ黒だ。

「・・・?」

その黒が、俺の学校の生徒の学ランだと気づいたときにはもう遅かった。

全力でダッシュしていた俺はソイツとぶつかった。

日常2

俺は目の前の同じ学ランを着た生徒に顔からぶつかってしまった。

「ごふうっ!!」

二人同時に倒れこむ。

「っす、すいません!」

反射的に伸びのけ、相手に向かって土下座をすれば・・・

「許さない」

異様に低くとがった青年の声がした。
これにはさすがにドッキリだ。

「え、・・・ってか許してもらうための謝罪じゃないし・・・」

「じゃあ、何のため?」

「・・・・・・カタチだけの・・・」

そこまでいいかけて、俺はハッとした。
学校に送れてしまうではないか!!

「あ、俺・・・学校あるんでっ!!」

立ち上がろうとした俺の腕をぶつかった相手が掴んだ。

「待てよ」

「っ学校に遅れるんだ! 離せ!!」

振りほどこうとしたが、すごい力で腕が折れそうになる。

とうとう俺はヤツの腕をほどうとするのを諦めて、彼の前にしやがみこんだ。

——もしかしたら、怪我とかしてるかもしれないしな・・・ああ、面倒・・・

「・・・すわせろ・・・」

「は？」

「吸わせろ」

——何を？

疑問を問い返すより早く、路上に横になったままの相手は俺の太ももにかじりついてきた。

「っひい！？」

予想外の衝撃に思わず尻餅をついてしまう。
そうしている間にも、相手は制服の上から太ももにかじりついて
いる。

「っ、やめろ！！」

——・・・もしかして、こいつ吸血鬼か？

一瞬思ったが、タブン違うだろう。

だって吸血鬼って首筋にかぶりつくのが王道だろ？

俺は相手の髪を鷲づかみにし、引っ張った。
しかし、顔はいっこうに離れない。

——っ・・・だんだん痛くなってきたっ！！

「離せ、変態！！誰かー！！！！ここに変態がいます！！助けー！！」

引っ張りつつの叫び声。

俺が髪を引っ張った反動で彼の顔が俺の股間に来た。

「っあ………」

これにはさすがに叫び声が出なくなる。

それに、この状況を誰かに見られでもしたら……

青年は今度はももに被りつくのとは対照的に、俺の股間に吸い付くようにかぶりついてきた。

「っ……や、め！！！！……あ」

思わず体をくねった。

「っ……ふざけ、んなあ！！！！」

最後の力。

それをふりしぼって、青年の顔ごと引っ張りあげた。
すると、いとも簡単に彼は俺から顔を離す。

「っハアハア……お、お前初対面に何考えてんだよ！！死ぬか
と思っただろ！！！！」

もう俺の制服はきわどいところが濡れていた。
まるでお漏らししたみたいじゃないか！

睨みつければ、相手は楽しそうな笑みを小さく浮かべた。

「・・・あれ、間違えた。」

「つぶざけんな！ってか、何を間違えるんだよ！！！」

「・・・いあ、最近マクドナルドのシェイク吸ってなくて・・・」

そして、青年はあっさり立ち上がった。

というか、あの吸い方は絶対間違えたはずないだろ！

・・・でも何故だろう？目の前の男が嘘をついているようには見えない。

「・・・俺、夜崎^{やまざき}隆^{りゅう}。悪かった。御礼に今日シェイクおごるよ。」

真顔で俺に言った後、青年はスタスタと学校へ行ってしまった。

——・・・ああ、最悪・・・

美少女にかまれるならまだしも、男にかまれた・・・しかも、たっちやったし。

どうすればいい？きわどいところが濡れてしかも、たっている。

こんな格好では到底学校に行けるわけが無い。

俺は近場の公園でズボンを洗うのを目的に、歩き出した。

日常3Ⅱ予感Ⅱ

俺は学校の近くの公園のベンチで一人、むなしく空をみながら座っていた。

――・・・今日も青いなあ・・・

何故俺がここにいいのかという・・・

ズボンのきわどいところがぬれてしまったからだ。
たってしまったからだ。

学校に行きたくなかったからだ。

理由はいろいろあるが、一番の理由としてはぬれたズボンを乾かすためだ。

初対面の青年に、ズボンを噛まれ濡れてしまった。

だから俺は学校の近くの公園の水道で、ズボンを丸ごとジャブジャブ洗ったのだ。

正直、ぬれたズボンは気持ちが悪い。

俺にあんな行動をとってきた青年も気持ち悪い。

「・・・美少女ならよかったのに・・・」

そっと俺が呟いたときだ。

―ドクン―

「っ!？」

突然、心臓の高鳴りとともに激しい目眩が襲ってきた。

俺は押し寄せてくる吐き気と気分の悪さで、その場にうずくまる。

——・・・ついたい、何だ・・・・・・？

——確か俺が持病なんてなかったはず・・・

疑問に思いつつ、しばらくすると体中の痛みは引いていった。

俺は完全に目眩が治るのと同時に立ち上がった。

——すごく、嫌な感じだ。

さっきまで穏やかだった風の勢いが増した。

痛みや目眩は全て引いたはずなのに・・・。

俺は何故か自分の心に残った不安をかみ締めていた。

キュツキュキュ・・・

その時、公園の入り口付近から自転車が急ブレーキをかける音が聞こえた。

「・・・？」

そちらをみれば、そこには自転車にのった青年がいた。

「・・・優太郎・・・」

俺は彼の名を呼ぶ。

すると、優太郎は影のある顔にニヤリと笑みを浮かべた。

「朝城！・・・お前、ボイコットか？もう授業始まってるし。」

「・・・遅刻魔のお前に言われたくないね。」

俺はさっきまでの出来事を全て頭から消去しようと努力しつつ、
優太郎のほうへ歩き出した。

「げっ！お前、そのズボン濡れてんじゃん？・・・なんで？」
近くに來たからこそ気づけた、ズボンの変化。
優太郎は顔をしかめた。

「ああ、ちょっと花に水をあげるおばちゃんがさあー俺の水あげ
てきたんだよ」

いえるわけがないだろう。
しらない青年に嘲まれた、なんて。

俺は苦笑いを浮かべつつ、歩き出した。

「つたく、顔にかけてきたならまだ分かるけど、下半身全部がぬ
れるくらいってどんだけだよ！」

ばかくせえー、と笑いつつ後からついてくる優太郎。

お前がバカだ、とは腐ってもいえまい。

だって、おかしいと思わないだろうか？

コイツが何故、授業が始まっていることを知っているにも関わら
ずここにいるのかという事を。

俺と優太郎は、家の方向が同じため下校は一緒にするが登校は別
々にする。

理由は簡単で、優太郎の登校時間がおかしいからだ。

高校に入ってから、優太郎は毎日一時間目が終わってから登校するように変化した。

何故なのかは分からないが、単純に寝坊だろう。

二人でたわいも無い話をしつつ、歩いていればあっという間に学校についた。

その瞬間、一時限目の終わりを告げる学校のチャイムが鳴り響いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3948ba/>

～箱～・・・高校生は告げる

2012年1月10日12時45分発行